

少女が目を覚ましてまず思ったのは、「温かい」ということだった。ここがどこで、自分が誰なのかを自問自答する前に、温かくて右目から涙が一粒零れた。

上半身を起こそうと思ったが、なんだか重くてできない。見ると、自分の体にこれでもかと毛布がかけられている。強張った筋肉をもぞもぞと動かし、なんとか頑張っ

て起きた。

少女は、静かに辺りを見回した。

壁際にある小さな暖炉が燃えている。橙色の柔らかな火が、生き物のように優しくゆらめいている。

決して広いとは言えない部屋。中央に小さな丸いテーブルがある。自分が寝ているものの他に、ふたつ、ベッドが置いてあった。ひとつは毛布がぐちゃぐちゃになっていて、その上にコインや皮手袋やトンカチが散乱している。対してひとつはきちんと毛布も畳まれ、とても綺麗にされている。

その綺麗なベッドの隣には木の

本棚があり、何冊か本が収まっていた。すぐ脇には、クローゼット。その近くにドアがある。

ぱちん、と暖炉の薪が爆ぜた。

ガチャリとドアのノブが回り、誰かが部屋にやって来た。

「あ」

リアムは身を起こしている少女を見て、

「気がついた？」

と微笑んだ。

ランタンとトレーをテーブルに置きながら、

「あなた、海岸で倒れていたみたいなの。それをネックとノラン——えっと、私と一緒にここに住んでる、家族というか友達というか仲間がね、浜に流れ着いたあなたを助けて、運んできたんだよ」

水の入ったコップを差し出した。

少女は黙ったままコップを受け取ったが、水を飲むことなく、じいっとリアムの顔を見つめた。「苦しいところとか、痛いところはない？」

少女は無言のまま頷いた。

「よかった。私はリアム。あなたのお名前は？」

少女は少し俯き、

「——ノア」

小さく言った。

初めて声を出してくれた。鈴を転がすような声だった。

リアムは少女が喋れることに安堵し、

「ノア、うん、素敵な名前だね」

と再び微笑んだ。

「ノアはどこからきたの？」

リアムの問いに、ノアは小さく首を振り、

「わからない」

「船に乗ってたの？ どこかの海岸で事故に遭った？」

「……わからない」

「そっか……」

回答が一言で終わってしまい、会話がうまく続かず、無言の時間が流れた。

その時、ぱちん！ と、ひときわ大きな音で暖炉の薪が爆ぜた。

驚いたノアの体が震え、持っていたコップの水が、はたたっ、と毛布に零れた。

「あ」

リアムが声を漏らし、

「……ご、ごめんなさい」

ノアは濡れた毛布を前に、わたわたした。

その懸命に慌てる様子がおかしくて、ふふっ、と、リアムは噴き出した。

そして、その笑いが緊張感を解き、ようやく、少女が一命を取り留めたことへの喜びが湧いてきた。リアムは自分のベッドにかけていた、乾いたタオルを持ってきた。「私こそごめんね、いきなり色々聞いちゃって」

水が溜まっているところに置いて拭き取り、毛布を交換してあげた。

ノアは先ほど投げかけられた言葉を思い出しながら、手際のいいリアムの働きをじっと見ていた。

自分はどこから来て、何者で、何故、ここにいるのか。

ノアにはわからないことばかりだった。

ノアは改めて、濡れた毛布を広げているリアムの顔を見た。

リアムはノアの大きな瞳に気づいてニコリと笑った。

やさしい、とノアは思った。

やさしさ——この感情は感じたことがある。

何故だろう。その時、ノアはなんだか急に恥ずかしくなり縮こまった。

リアムが「ちょっと待っててね」と濡れた毛布を持ってドアを開くと部屋の中をふんわりといい香りが漂い、ノアの鼻にかかった。

次の瞬間、「ぐうううう」と、ノアのお腹からウシガエルの鳴き声のような音がした。なかなか派手な大きさだった。

とっさにお腹を押さえるノアに、リアムが振り返った。

ノアはいよいよ真っ赤になって、毛布で顔を半分隠して、

「ごめんなさい……」

リアムは優しく、

「謝ることじゃないよ」

と首を振る。

「ほぼ一日寝てたんだし無理もないよ。それにお腹が空くのは、生きてるってこと」

それからリアムは一度扉の外に顔を出して何かを確認する。

「ちょうど準備できたみたいだし、下でご飯食べよ。あ、でもその前に」

思い出したようにリアムはクローゼットを空け、「私のお古になっちゃうけど」とネックとノランの服をかきわけ自分の服を出して、

「これに着替えて。ちょっと毛布置いてくるね」

と手渡して、一度部屋を後にした。

ノアは手渡された服をぼーっと見ていたが、

「脱いだ服はその辺に置いといていいから！」

部屋の外からのリアムの呼びかけにハッとして着替えを開始した。